

自殺大国を走る

猪股 正 (弁護士 埼玉総合法律事務所)

今、この日本では、13年連続で年3万人以上、1日90人が自殺によって命を失っている。自殺率は先進国中、ワースト1だ。自殺対策として、埼玉では、昨年からは、行政と民間が連携して、「暮らしとこころの総合相談会」を毎週開催している(木曜15時〜ジャック大宮5階)。

この相談会参加団体の有志で企画し、昨年12月10日、11日、「県内横断・みんなで自殺をなくすリレーマラソン」を敢行し、澄んだ青空の下、正午に、秩父・榛(むく)神社をスタートした。榛神社は、明治時代、借金や貧困に喘ぐ農民が秩父困民党を立ち上げて蜂起した場所だ。秩父から、36区間、85キロ、参加者56人、1区間2人〜10人が併走し、延べ134人が、たすきをつなぎ、「みんなの力を合わせて自殺をなくそう。」と自殺防止を訴えながら走り、翌日の昼にさいたま新都心にゴールした。新聞を見て参加した人、小学生・中学生、町役場の人、弁護士・司法書士・社会福祉士も走り、沿道からはたくさんの方の応援をもらった。

このリレーマラソンの企画や準備の中心を担って支えたのは多重債務の被害者である夜明けの会の人たちだ。支援を受けて路上生活から抜け出した人もランナーとして走った。この企画を知ったある男性からは次のような連絡をもらった。少し前に友人を自殺でなくした。自分に何かできたのではないかと悔やまれて仕方ない。

「もう友人は戻らないが、今、自分にできることをしたい。今回は都合がつかないが、自分の分も頑張って走って欲しい。」

こういった人たちの思いが、マラソンに参加した人や応援してくれた人から、リレーマラソンのたすきのように、次の人へ、また次の人へとつながれて、広がっていくと信じ、今年も、また走りたい。

さいたまここに人あり

心ゆさぶられ

人とのつながりを大切に

紙芝居を通じて 相對した人と



中平順子 さん

街角から学校、養護施設、阪神淡路大震災後の神戸まで、各地で紙芝居の講演活動をつづける、さいたま子ども文化研究所の中平順子さん。はじまりは、公民館での紙芝居ボランティアでした。「良質な文化との出会いは、大人も子どもも変える力を持っている」という中平さんは、紙芝居を通して子どもを育てたいと言います。さいたま市役所前の喫茶店「cafe 土溜茶（ドルチェ）」を夫婦で経営するかたわら、無料の子育てサロンなどにも取り組んでいます。「cafe 土溜茶」を訪れ、お話をお聞きしました。

子どもたちの感性って素晴らしい！

最初は絵本だったんです。私は絵本がすごく好きで、子どもに絵本を読んだり、私自身も見るのが好きだったんです。

自分の子どもに手作りの絵本をつくってほしいと、夏休みに子どものお友だちやお母さんたちに声をかけて、自宅で絵本づくりをしたんです。そうしたら、子どもたちが30人も来ちゃった。

3日くらいで絵本づくりも終わるだろうと思っていたら、それが1週間もつづいたんです。1冊、2冊、3冊…5、6冊もつくる子もいて、止まないんです。うちの子もそうでした。

でも最初は、絵を描けない子がいっぱいいたんです。だから、絵を描く前に、すてきな絵本を見せるんです。良い本と出会うと、作家のお話が心に沈みますよね。そうすると、自分もすてきなお話をつくりたいってなるじゃないですか。

ともかく導入に、絵を描く喜びを感じてもらいたいと、近所の建材屋さんで包装してきた紙があるので、その紙をもらって道路に敷きつめて、自由に好きな

だけ描かせました。絵を描きながらどんなお話にしたいか考えて、つて。最初は全然描けなかった子たちもどんどん描きはじめて。午前中いっぱい、道路が絵の川のようになつて。午後からは用意したたたくさんの紙に色鉛筆と絵の具を使って、好きな色で絵を描いていきました。

紙芝居との出会い

そういうことを自宅でやっていたら、公民館から、「公民館でやってください」という依頼が来ました。それから夏休みと冬休みに、公民館で「絵本子ども教室」というのがはじまったんです。そのなかで職員の方たちと仲良くなつて、児童館がまだないときに「おはなし児童館」というものをやることになったんです。

そういえば小さい頃に、街角で紙芝居をみたなあつて思い出しました。私は小さい頃、紙芝居を見ちゃいけないって言われて見させてもらえなかつたんです。

遠足の話、いろんなことを思い出しながら、だれ一人、同じ話じゃないんです。「気持ちよく、楽しく描いてね」とだけ言っていたんですが、上手に描くのではなくて本当にすてきな本が出来上がりました。子どもは天才だと思えました。一人ひとりがピカソかと思うくらい…そのくらい勢いがよくて線が生き生きしているんです。子どもたちの感性って、素晴らしいと思えました。

おこづかいがなかつたのと、不衛生だったので、いつも後ろの方でそうつと見ていて、だけど楽しかつたんです。

それをふつと思いついたんです。その頃、絵本作家の方と知り合いになつて、その方からもらった紙芝居があつたんです。それをやってみようと、初めて子どもたちの前で演じました。家で子どもに見せているのとは全然違うんです。手がぶるぶる、足はがたがた震えて、「抜き間違えたらどうしよう」つて。

でもびつくりしたのは、子どもたちは



もちろん、親たちも、最初は引いてみていたおじいさん、おばあさんたちも、目がどんどん子どもの目になっていく。大人たちが子どもと同じ目のかがやきになっていくんです。

無事に終わって、みんなが拍手をしてくれて、ホッとして控え室に戻ったけ

ど、まだ震えは収まらないんです。それでふっと鏡を見たら、私の目がさつき目の前にいた大人と同じ目のかがやきをしていたんです。子どもと同じように紅潮しているんです。「わー、すごい」って

遊びのなかの深い世界

思いました。演ずる方も、見る方も、みんな一緒に同じ喜びの光に満ちていくというのを、そのとき初めて体験したんです。

公民館の職員の方から「ぜひ続けませんか」と言われて、それから公民館でイベントのあるたびに紙芝居を親子に見せることになりました。

そのうちに、絵本づくりと紙芝居だけじゃなくて、子どもたちと一緒に草花で遊ぶことを始めたんです。

ちょうどイベントの時にうちの庭に椿が咲いていたんです。イベントのなかで、何か遊びを入れてくれといわれて、椿の花で首飾りをつくったり、葉っぱで笛をつくったりしました。そうしたらものすごい喜ばれて、職員の方とも意気投合して「毎月やろう」ということで、毎月1回、15年続きました。

それから、公民館のなかに老人会がありますよね。3回に1回はお年寄りたちに声をかけて、子どもたちを内側にして、

その周りにイス席をつくってお年寄りが座って一緒に紙芝居を見ていただいて。そのあとに、お手玉やおはじき、昔の遊びを一緒にやりました。

そうしたら、お年寄りたちが本当に喜んだの。「お手玉なんて80年ぶり」とおっしゃったおばあさんを、子どもたちが囲んじゃったんです。「昔とった杵柄」。これも死語になってしまいましたね。いま、いろんな文化が失われているんです。私は、遊びを通して日本の美しい造形遊びとともに、文化を取り戻したいと思っています。そこには、絶対にお年寄りが必要だとも思いました。

小学校の先生が「いまの子どもたちは指先を使わない」といつているのを見たんです。いまの日本の産業は、先人たちが風をつくったり、お手玉したり、指先

を使った遊びをしたからこそ、この産業は発展した、と。自分の子どもと周りの子どもたちを見たとき、だれもそんな遊びをしていない。大変なことだと思っただけです。おはじきをはじめて当てていく遊びにしたって、ほどほどの力が分からなといけない。人間関係も同じです。そこから人間の知性が育たなければ、本当の文化にはならないと思っ、いろいろな遊びを取り入れました。

そういうことを公民館の社会教育のなかでやっていきました。社会教育のなかで、遊びがこんなに深い世界を持つていることに気づいたんです。

そのなかでお友だちと「紙風船」という紙芝居グループをつくったんです。そのグループができたときに、なんとなく「恥ずかしい」と思っていたのがふつきれたんです。

また社会教育の素晴らしい職員の方から「街角紙芝居をやらないか」といわれたんです。そのときは、もちろん「OK」でした。公民館だけじゃなく、スーパールの前、四つ角のひろば、あっちこっちに出向いて行ってやったんです。そのとき初めて拍子木持つて、呼び込みもやりました。恥ずかしかったですよ、ほんとに。

そうしたら、商店街の方が喜んでくださったね。そのときに、「そういえば、水飴配ったなあ」って思い出して、一斗缶で水あめを買って配ってね。夏は垂

紙芝居を「一生の仕事」にしたい

あるとき、「絵本づくりを教えてほしい」という小学校の先生方が習いにきました。そのなかで学校の先生と仲良くなっていたって、その先生が昔の複式学級に異動になったときに、「紙芝居をしに来てほしい」と言われたんです。

その先生に出会う前、戸田にある養護学園に紙芝居のボランティアで行っていました。その夏祭りのとき、一人の子がいなくなっちゃったんです。その子は、返事も、反応もできない子で、「大変だ」ってみんなで夏祭りをストップして探しまわって、その子は1時間後に見つかりました。

それから3年後、先生に誘われて複式学級にいったら、その子がいるんですよ。「あ、Aちゃんだ」と。そこで、「おおきなあれ」という紙芝居を演じました。Aちゃん以外の子どもたちの反応はすごい

れちゃって大変で、冬は固くなりすぎちゃって難しいんですね。ところが、大人たちが喜んでちゃって。割り箸を半分に折ってね。人気でしたね。

です。ケーキの場面で飛びついてきて、ヨダレを流して、紙芝居もなめるし、大変な反応でした。

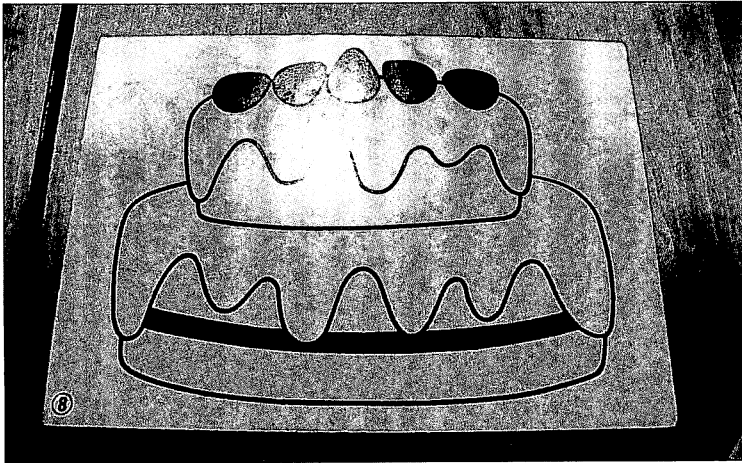
そのあと、先生に「紙芝居を貸して」と言われて、その先生に紙芝居の一式全部貸しました。それからだいぶ長いこと返ってこなかったんですが、しばらくして先生から「中平さん、Aちゃんが『おい、おい、おおきなあれ』って言えなかったんだけど、言えるようになったのよ」って連絡が来て、会いにいきました。そうしたら、紙芝居はヨダレとシミだらけで：返されたときはビックリしました。もう、べちゃべちゃで、どれほど美味しかったんだと思います。その紙芝居は私の宝物で、いまでも持っています。(写真)。

3年後にまた訪れたとき、扉を開けたら先生が「あー、紙芝居の中平さん！」っ

て言ったんです。そうしたら、横にいた男の子が私を見たときたんぱーっと飛び上がった私に突進してきたんです。

あーあのAちゃん！

二人でガバツと抱きあって、飛び跳ねました。なんて素晴らしい出会いをしたんだろうと思いました。私、そのときに「一生紙芝居を仕事にしよう」と決意し



ました。

それまでは、ずっとボランティアだと

子育ては社会をつくっていく

思っていました。でも、ボランティアじゃない、「一生の仕事」にしよう。

Aちゃんの経験から、質の高い作品はこんなにも人間を育てるんだらうって実感してきました。もちろん、演じるなかで私自身も育ったんです。子どもにとっても、私にとっても、衝撃的な出会いでした。それから私、変わりました。紙芝居に対して、もっと一歩踏み出そう、もっと良く知りたい、もっといろんな人に広めたい。それと同時に、たくさん演じ手が増えると、世の中が変わると思いました。私自身が変わったから。

だけど、感動する出会いがないと人は変わらないんです。「ああしたい」「こうしたい」という思いがないと。それは子どもにとっても同じこと。紙芝居をとおして、生き方が変わりましたね。

出会いは文化で、いろんなかわり方、文化の表現があるんですけど、私はまったく自分の子どもを通して発見していったことを、この年までやりつづけてきたにすぎないんです。それがすごく子ども

の心を育てることに良いと言われたり、私も良いと思ったから一生懸命やってきたんです。あんまり固く考えずに、生活者の視点で、子育てしていくことは社会を作っていくことじゃないかと思つて。そのようなかわり方が原点ですから、難しいことはなんにもないんですよ。

カフェ 土瑠茶では、毎月13日に「チャイルドサロン」を開催。5歳までの子どもと父母を対象に、季節の行事に関連した遊びなど親子で楽しむイベントをおこなっています（実費負担）。その他、「紙芝居作品研究会」や「うたごえカフェ」などを随時開催。2月からは毎週月曜日と金曜日にママとベビーのための「MaMa's Cafe Salon」がはじまります（要予約）。詳細はお問い合わせ下さい。

カフェ 土瑠茶

埼玉県さいたま市浦和区仲町 4-11-14

TEL/FAX 048-861-1755

<http://members.jcom.home.ne.jp/dolce34/>

新入生をけんちん汁で迎えよう

住吉 さと志

さいたま市立田島中学校

1 生徒会活動と 学校行事の現状

今日、学校行事はすっかり衰退してしまっています。これは今に始まったことではなく、20年以上前からそう言われて久しく、すでに末期的症狀を迎えていると言っても過言ではありません。その原因としては「日常的に時間がなく、行事をしつかりと取り組んでいく余裕がない」「若手の教員に行事（特に文化的なもの）の実体験（感動体験）が少なく、取り組みに魅力を感じていない」といったことが考えられます。

また生徒会活動にも同じことが言えます。問題行動が多発していたり管理体制が強化される中で、生徒の自治的な活動が保障されないようになっていきます。すでに教員側で決めたこと、上から押しつけられたことを受身的にこなすだけという状況です。生徒会活動は（部活などと比べても）どうも付け足しの活動に思われている節があります。

2 古くて新しい「意義」

それでは現在、生徒会活動と学校行事の意義を語ることは大変困難なのでしようか。そんなことはありません。生徒会活動は「学校づくり」の足がかりとなり、行事は「つながり」のきっかけとなるはずだと思っています。そのことは1987年に出版された、松本幸夫氏「生徒会活動入門―教師のための指導の手引き」（民衆社刊）にすでに示されています。出版されて23年以上経ちますが、その分析と実践例は現在にもしつかり通用するもので、私の基本的な考え方を支えています。古くて新しいというべきか、未だに現場ではこのレベルのことが達成できないというべきか、とにかく生徒会と行事は大変意義深くやりがいのある実践だということを思われます。今回報告する実践も、この本に提起されている意義をベースにして、新たに創造したもののなのです。

3 田島中学校の様子

田島中学校は現在二五学級で約950

人の生徒がひしめく大規模校でありま
す。場所はもと浦和の南西のはずれ、武
蔵野線（西浦和駅まで徒歩5分）と新大
宮バイパスと荒川にはさまれている所に
あります。付近には巨大な田島団地があ
り、それ以外にも大きなマンション群が
ひしめいていて、まさにベッドタウンと
いったところ。しかしこのエリアはそれ
ら住宅が建つ前から工場や運送の倉庫や
人を越える教職員のうち、新任、臨任の
若い教員が三分の一で一年間ごとにメン
バーが大幅に入れ替わる（長く継続して
勤務する先生が少ない）学校でもありま
す。

部活は比較的盛んで実績もあります
が、部活で好成績をあげないと保護者か
らは指導力がないという評価をされがち
です。ですから本来あるべき姿とはほど
遠く、生徒たちの自治的活動にはなっ
ていません。生徒委員会は係活動に近く、
単に教員からの下請的な仕事を請け負っ
てやっている感が否めません。行事も精
選という名の削減をされ、残っているも
のはご多分に漏れず形骸化しているもの
が多いと言えます。

4 「一年生を迎える会」 の取り組み

入学式後一週間くらいで、だいたいど
の学校でも「新入生歓迎会」や「対面式」
という行事があることと思いま
す。田島中にも「一年生を迎え
る会」があるのですが、昨年ま
では5、6時限目を使って体育
館での部活紹介のみにとどまっ
ていました。

昨年度末から「今年の一年生
を迎える会をもう少し拡大し、
全校生徒の取り組みに変えてい
けないか」という話題が生徒会
担当の教員の間でかわされました。
それは別の学校で行ってい
た取り組みを田島中でもやれな
いかということでした。

その内容ですが、前半は上級
生との対面、役員の紹介やら
生徒会組織の説明と続き、その
あと部活動紹介になっていきま
す。ここで部活紹介に出場して
いない残りの上級生たちは、全
員グラウンドに出て一斗缶のかま

どに向かい、薪で火をおこして、生活班
ごとに「けんちゃん汁」を作ります。そし
て部活紹介が終わった後、上級生の生活
班（一クラス6班、全部で96班）に新入
生たちは招かれてそこで昼食を食べつつ
交流するというものです。



企画・原案は前もって運営委員会で確認してもらっていましたが、4月2日に職員会に提案。いきなりの大イベントにほとんどの教職員はそんなことができるのかと疑心暗鬼の様子でしたが、いくつかの学校での実例を紹介して了承してもらいました。

しかし、ただでさえ忙しい4月当初に準備してもらうのですから、異動してきただばかりの教員は目を白黒させるわけで、生徒会役員も春休みからフル稼働と相成ります。始業式の翌日に選出された実行委員もてんやわんやの大騒動です。主な流れは次の通り。

(春休み中) 生徒会本部役員、生徒会担当で用具などの確認

その他の係の先生は買い出しや発注、打ち合わせ

(8日) 始業式、入学式

放課後、部長、旧委員長会議にて説明

(9日) 2、3年の各クラスから実行委員選出

員選出

(12日) 第一回実行員会、原案提案、係分担、担当の先生と係会議

(13日) 各係ごとの前日準備、体育館

リハーサル

(14日) 1年生を迎える会当日

全96班の鍋の食材の用意は栄養教諭の全面的な協力を得て、給食室にお願いすることができ、他にもおにぎりや唐揚げも添えて頂けることになりました。(こいういう意味で自校給食はフットワークが軽いです。給食室もおもしろがってもらえたようです。)

いよいよ当日。心配していた天気も穏やかな晴天となり、絶好の「鍋日和」と相成りました。校庭では薪を焚く煙が幾筋も上がり、歓声が上がります。分担された係の仕事をあーだこーだ言いながらそれぞれやっていきます。入ってきたばかりの新入生たちは先輩たちの「もてなし」と動きにびっくりしています。先輩たちの方も、そこはやはり新入生たちに悪く思われたくないし、自分たちで新たな伝統を創っているという意味もあるので、しっかりと取り組んでいます。校庭で白昼堂々と火を焚けるといいうのも楽しいようですし、やはりみんなでものを作って一緒に食うということはなかなかいい効果があるようです。「おいしい」「味薄い」「お代わりちよーだい」……お互いまだよく知らない同士、ぎこちなく



も微笑ましい会話がかかるのもよい風情です。

最後に新入生代表者のお礼の言葉。「中学校は少し怖いと思っていたけれど、先輩方に優しくしてもらってうれしかったです。けんちん汁もおいしかったです。」



来年、私たちもこんな風にできるようになりたいと思います。ありがとうございます。この春ののどかな光景を田島中のスタートにしよう。これを伝統行事にしたら生徒にとっていい取り組みになる……その思いが叶った瞬間でした。

田島中としては初めてのことでした

が、なんとかスムーズにいったように思えます。成果としては一応、次のようなことが考えられます。

- ・田島中が一つのまとまりとして動いていることを意識づけられる
- ・新入生に具体的に何かをしてあげるといふ場面があり、上級生としての責任感、意識が高まる
- ・新入生が上級生（あるいは田島中）に対してよいイメージを持てる
- ・とつぱじめの行事に取り組むことでクラス作りの一助となる
- ・生徒会役員が中心となり、実行委員とともに伝統を作っていくという意識が持てる
- ↓みんなで一緒にものを食べたり遊んだりすること、そのものが楽しいことだという協働の実感

5 「非日常」を 楽しむこと

こういう形の行事や生徒会活動はひよっとしたら時代遅れなのではないかという思いもあります。しかし、こうい

う学校ならではの「文化」を守っていくこと、こういう行事の価値を伝えていくこと、忙しいけれども手間を惜しまず大胆にしたたかに計画していくことは、やはり必要なことなのではないでしょうか。

大きな行事に生徒会で取り組むことは、学校の再建の大きな武器となると思っています。そして行事の取り組みを通して「荒れ」や問題行動など、学校が抱えている諸問題を乗り越えていく学校の体制をつくりあげていくことができると思います。さらに生徒の無気力、無感動といった状況を乗り越えさせていく上で有益な活動になります。また一つの学級だけではなくどうしても作り出せない感動や感激も学校全体の集団的取り組みを通して作り出すことができます。そして教師集団の形成にとつて大きな機会となります。（この段は前述の「生徒会活動入門」より私が共感した部分、その要点をお借りしています。）

何よりも行事は楽しい。準備も当日もそれを思い出すときも実に楽しいものです。行事という「非日常」的な取り組みの魅力は、そういうところにあるのだと思っています。